様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００８００

研究課題名（和文）戦前と戦後を「分断」から「連続」としてとらえ直す日本の中国語教育史の新たな研究

研究課題名（英文）Study on the Chinese language education focusing on the continuity from the prewar to postwar period. In the case of the Toa Dobun Shoin College to the Aichi University.

研究代表者
石田　卓生（ISHIDA, Takuo）

愛知大学・東亜同文書院大学記念センター・研究員

研究者番号：５０７２７８７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は日本の戦前における中国語教育が戦後どのように展開したのかを明らかにするものである。その事例として、戦前日本の有力中国語教育機関・東亜同文書院と、戦後に東亜同文書院の後継校として設立された愛知大学の中国語教育に注目して調査し考察を進めた。

その結果、次のことが明らかとなった。東亜同文書院では日本人が中国で中国人と共に暮らしていくことを想定した中国語教育が進められていた。愛知大学では東亜同文書院と同じ教材と教授法を用いて中国語教育が始められたが、その中国語教育は日中間の国交の途絶という状況下にあって知識や文化理解を想定するものへと質的に変化した戦後の中国語教育に対応することは困難であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで近現代日本の中国語教育は、戦前は中国進出や侵略を支える実用目的に偏っていたとされ、戦後は中国理解を進める文化的な性格に一変したとされてきた。対して、本研究は同じ教員と教材で行われた戦前の東亜同文書院と戦後の愛知大学の中国語教育を分析し、戦前の中国語教育は戦後も継続されたが、戦前の中国生活を想定する内容が国交が途絶した戦後では現実から乖離したため留学や観光など一過性の交流を内容とするものへと変化したことを明らかにした。さらに東亜同文書院で作成され愛知大学で改訂された教材の翻刻『愛知大学版東亜同文書院大学編纂『華語萃編』初集』（不二出版、2023年）によって、そうした過程を具体的に示した。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clear how Chinese language education in Japan had developed in the prewar and after the war period. The author dealt with some case studies, focused on the Chinese language education system at Toa Dobun Shoin College, before WWII, and the Chinese language education system in Aichi University, which was succeeded to Toa Dobun Shoin, after WWII.

As a result, the author cleared some findings. In the case of Toa Dobun Shoin, Chinese language education system was assumed that Japanese people would live in China. On the other hand, in the case of Aichi University, Chinese language education system had started using the same textbooks and methods of Toa Dobun Shoin. However the Toa Dobun Shoin style of Chinese language education system was difficult to introduce to ones of Aichi University, because of the contents of Chinese language education had oriented to getting cultural understanding by and under the breakdown of diplomatic relations between Japan and China.

研究分野：人文学

キーワード：東亜同文書院　愛知大学　中国語教育　華語萃編　中日大辭典　東亜同文会　日清貿易研究所

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

これまで近代日本の中国語教育、その主たる舞台であった高等教育機関での中国語教育については、戦前は利己的な中国進出や中国侵略に依存しており、文化面での貢献や影響力があって科学的教授法がなされていた欧米言語教育に対して実用目的に偏り、その教授法や研究も劣っていたとされてきた。例えば、六角恒広は次のように述べている。

> 日本の中国に対する軍事・政治・経済などの面で、中国に出て行く日本人の生活面で役立つために教育され、学んだものである。［中略］音声学的なあるいは音韻論的なものをふまえた発音教育はなされなかった。文法的な解説もなかった[1]

その後、敗戦が「中国語学研究と科学的教育が生まれる契機」[2]となって突如として欧米言語教育のような文化的性格をそなえつつ科学的教授法をとるものとなり、「中国を正しく認識し、理解しようとする」[3]ものへと変わったとされてきた。

こうした敗戦の前後を区分する捉え方には、戦争が行われた戦前期における事象を批判的に捉え、それに対して民主化された戦後の事象を肯定的に捉えようとする政治イデオロギーの影響を見て取ることができる。しかし、そうした善悪二元論で実態を正確に把握することができるだろうか。そもそも、外国語教育を実用面と文化面に明確に区分することは困難である。外国語で彼の地の人々と円滑に交流するには、発音や文法だけではなく、その言語を生み出した文化慣習も踏まえる必要があろう。また、戦前の欧米言語教育が中国語教育よりも文化的で高度と目されたことについては、当時の受験やキャリアデザインにおいて欧米言語教育が極めて重要であったということの影響をもっと重視する必要があるのではないか。さらに、敗戦によって大きな変化があったとしても、明治から敗戦まで 70 年近く行われた戦前の中国語教育の経験の蓄積は批判的に扱われるだけのものだったのだろうか。こうした疑問から、私は敗戦を機に時期区分する中国語教育史の捉え方に問題意識を抱くに至り、かえって戦前と戦後の連続性に注視することによって実態を正確に解明することができると考えた。

２．研究の目的

本研究は、これまでの中国語教育史が戦争や敗戦など教育外部の事象との関連性を重視して戦前と戦後を分断して捉えるのに対し、中国語教育機関や教育者、教材、教育方法などの教育活動を戦前から戦後を通時的に分析することによって、戦前の中国語教育が戦後においてどのように展開したのかを明らかにしようとするものである。

３．研究の方法

本研究は、戦前の中国語教育の戦後における展開の実態を明らかにするために、戦前の東亜同文書院の中国語教育活動と、敗戦後に東亜同文書院の後継校として設立された愛知大学の中国語教育活動を事例として調査し考察する。具体的には下記の方法によって進める。

(1) 中国語教科書『華語萃編』の東亜同文書院使用本と愛知大学使用本の分析

東亜同文書院では専用の中国語教科書『華語萃編』が作成され使われており、中国社会や中国語の変化に応じて改訂されていた（石田卓生「『華語萃編』初集にみる東亜同文書院中国語教育の変遷：統計的手法を援用した分析」『中国研究月報』72（2)、2018 年 2 月)。この『華語萃編』は、戦後の愛知大学でも元・東亜同文書院教員などによって使われていた。しかし、これまで愛知大学使用本についての詳細な分析は行われてこなかった。本研究では、愛知大学使用本の版本研究や東亜同文書院使用本との比較をすることによって東亜同文書院の中国語教育の戦後における展開を解明する。

(2)『華語萃編』愛知大学使用本と愛知大学作成中国語教科書『中文会話教科書』の分析

初期の愛知大学の中国語教育では東亜同文書院の『華語萃編』が使用されていたが、1960 年代には愛知大学独自の教科書『中文会話教科書』（大安、1964 年）が作成され、『華語萃編』に替えて使われるようになった。両書を比較することによって、東亜同文書院と愛知大学それぞれの中国語教育の特徴を明らかにする。

(3) 関係者への聞き取り調査

『華語萃編』および『中文会話教科書』を使用していた当時の愛知大学の卒業生および中国語教員への聞き取り調査を進めることによって、教育現場の実態や東亜同文書院の中国語教育と愛知大学になってからの中国語教育の相違点を明らかにする。

４．研究成果

本研究は近代日本の中国語教育を、従来のように戦前と戦後で分断的に捉えるのではなく、そ

れらの連続性に注目して観察するために、戦前の東亜同文書院と、その後継校として元・東亜同文書院教職員が中心となって戦後に設立された愛知大学の中国語教育を調査し考察した。

その結果、次に述べるような戦前の中国語教育の戦後における展開の有様を解明した。

戦前の東亜同文書院の中国語教育は、日本人が中国人と中国で共生していくことを想定したものであり、たしかに生活上の実用面を重視したものであった。しかし、魯迅などによる現代文学作品を教材として取り上げたり、教員の中国語についての語学的研究が進展する中で授業において文法解説が始められたり、未完に終わったものの中国語辞書の編纂すら行われたりするなど、いわゆる科学的教授法によって文化面においても貢献しうる教育活動が実施されていたことが明らかとなった。さらに、そうした東亜同文書院の中国語教育は教員や教材、方法そのままに戦後の愛知大学において継続していたことも確認することができた。これまで戦前の中国語教育は日本の利己的な中国進出や侵略に依存していたとされてきたが、もしそうだとすれば敗戦によって東亜同文書院の中国語教育は破綻することになろう。しかし、実際には戦後もそのまま受け継がれていたのである。

そのように戦後においても継続されていた戦前以来の東亜同文書院の中国語教育は、1950 年代後半から 1960 年代にかけて、短期的な中国訪問や留学など一過性のコミュニケーションを想定するものへと変化する。これは一つには中国との国交が途絶した状況にあっては中国での生活を想定する教育内容が現実と乖離してしまったことを要因とする。二つには戦前の選良教育的な高等教育が戦後は大衆教育へと変化したことにより、中国語選択者に対して戦前のように専門的な語学力習得を求めるものではなくなり、中国に関する知識の一つという教養的側面の比重が高まったことを要因とする。

つまり、戦後における中国語教育の変化は、敗戦が直接的な契機となっていたのではなく、中国語によるコミュニケーション機会の減少と中国語教育が主に行われる高等教育における中国語学習のねらいの変化を起因とするものであったことが明らかとなった。

以上については、「東亜同文書院大学中国語教育の戦後における展開について：愛知大学を事例として」（日本現代中国学会第 71 回全国学術大会、2021 年 10 月 24 日）、「東亜同文書院から愛知大学へ継承された中日辞典づくりと中国語教育の展開」（2022 年度豊橋市民大学トラム愛知大学オープンカレッジ、2022 年 12 月 17 日）において報告した。

また、これらの成果の基層となる個別研究における成果は下記のものである。

（1）中国語教科書『華語萃編』の東亜同文書院使用本と愛知大学使用本の分析および『華語萃編』愛知大学使用本と愛知大学専用中国語教科書『中文会話教科書』の分析

愛知大学の卒業生でもある今泉潤太郎愛知大学名誉教授が愛知大学初期の授業形式で『華語萃編』を用いて中国語を教授する読書会にコーディネーターとして参画し、同書の教育現場での使用の実態を観察した。同時に、今泉氏や読書会に参加する卒業生の協力を得ながら『華語萃編』愛知大学使用本を収集して版本研究を進め、愛知大学による改訂本 5 種の現存を確認した。これらは中国の言語改革に対応するために縦書きから横書き、繁体字から簡化字、注音符号から拼音へと細かく改訂されており、これによって東亜同文書院の中国語教育が戦後の中国語環境に対応しようとしていたことを明らかにした。

また、愛知大学の教員たちによって『華語萃編』に替わる教科書として作成された『中文会話教科書』（大安、1964 年）の構成、内容を『華語萃編』と比較することによって、中国で生活することを想定する内容の『華語萃編』に対して、『中文会話教科書』は旅行や短期的訪問などの一過性のコミュニケーションを重視するものであるという大きな相違点を見いだした。

こうした『華語萃編』に関する調査、研究の成果として『華語萃編』愛知大学使用本を翻刻した『愛知大学版東亜同文書院大学編纂『華語萃編』初集』（不二出版、2023 年 3 月）を出版した。

（2）関係者への聞き取り調査

中国語教育に関わる愛知大学関係者への聞き取り調査を進め、下記の成果を公表した。

戦前は東亜同文書院で中国語科目を担当し、戦後は愛知大学で中国語科目を担当した鈴木択郎の中国語教育を受けた卒業生・今泉潤太郎氏、浅井文人氏、亀山琢道氏への聞き取り調査を資料として公表した（「今泉潤太郎先生に聞く：愛知大学入学から中日大辞典編纂処へ」（『日中語彙研究』（7）、2018 年）、「愛知大学で中国を学んで」（『同文書院記念報』（30）、2022 年）、「亀山琢道さんに聞く」（『同文書院記念報』（31）、2023 年）。これによって、50 年代までの愛知大学の中国語教育は、教員、教材、教育方法すべてが東亜同文書院とほぼ同一であったことを確認した。また、1977 年に愛知大学に中国語担当教員として愛知大学に赴任した荒川清秀氏への聞き取り調査からは、荒川氏の赴任時点の中国語教育に東亜同文書院色はすでにほとんどなくなっていたことを確認した（「荒川清秀先生に聞く：中国語との出会いから愛知大学へ」（『同文書院記念報』（27）、2019 年）。

〈引用文献〉

[1] 六角恒広『中国語教育史の研究』東方書店、1988 年、13-14 頁。
[2] 同書、14 頁
[3] 同上。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　13件）

１．著者名 石田卓生	４．巻 76（4）
２．論文標題 1937年に実施された東亜同文書院生の中国語通訳従軍について	５．発行年 2023年
３．雑誌名 中国研究月報	６．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 亀山琢道、石田卓生	４．巻 31
２．論文標題 亀山琢道さんに聞く	５．発行年 2023年
３．雑誌名 同文書院記念報	６．最初と最後の頁 261-267
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 石田卓生	４．巻 31
２．論文標題 愛知大学東亜同文書院大学記念センター所蔵三田良信寄贈大村欣一旧蔵書	５．発行年 2023年
３．雑誌名 同文書院記念報	６．最初と最後の頁 55-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 浅井文人　石田卓生	４．巻 30
２．論文標題 愛知大学で中国を学んで	５．発行年 2022年
３．雑誌名 同文書院記念報	６．最初と最後の頁 289-295
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石田卓生	4．巻 29
2．論文標題 東亜同文書院に関する一次資料の所蔵状況：日本・中国・台湾に所蔵されている一次資料	5．発行年 2021年
3．雑誌名 同文書院記念報	6．最初と最後の頁 19-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石田卓生	4．巻 29
2．論文標題 東亜同文書院・愛知大学関係近刊図書の紹介（2020年）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 同文書院記念報	6．最初と最後の頁 279-281
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石田卓生	4．巻 73(11)
2．論文標題 書評　孫安石・大里浩秋『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』（東方書店）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 中国研究月報	6．最初と最後の頁 233-238
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石田卓生	4．巻 (51)
2．論文標題 書評　藤谷浩悦『井上雅二と秀の青春（一八九四－一九〇三）』（集広社）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 中国21	6．最初と最後の頁 22-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石田卓生	4．巻 (28)
2．論文標題 東亜同文書院と上海：愛知大学前史	5．発行年 2020年
3．雑誌名 同文書院記念報	6．最初と最後の頁 167-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石田卓生	4．巻 27
2．論文標題 荒川清秀先生に聞く：中国語との出会いから愛知大学へ	5．発行年 2019年
3．雑誌名 同文書院記念報	6．最初と最後の頁 45-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石田卓生	4．巻 27
2．論文標題 愛知大学の歴史についての講義：2018年度の大学史教育の取り組みについて	5．発行年 2019年
3．雑誌名 同文書院記念報	6．最初と最後の頁 55-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石田卓生	4．巻 27
2．論文標題 上海の東亜同文書院とその歴史マップ	5．発行年 2019年
3．雑誌名 同文書院記念報	6．最初と最後の頁 103-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 石田卓生	４．巻 27
２．論文標題 東亜同文書院・愛知大学関係近刊図書の紹介	５．発行年 2019年
３．雑誌名 同文書院記念報	６．最初と最後の頁 184-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　5件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 石田卓生
２．発表標題 東亜同文書院から愛知大学へ継承された中日辞典づくりと中国語教育の展開
３．学会等名 2022年度豊橋市民大学トラム愛知大学オープンカレッジ「愛知大学のドラマチックな誕生物語と創設期の卒業生たち」（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 石田卓生
２．発表標題 東亜同文書院の中国語教育と大旅行：中国語教科書『華語萃編』を中心に考える
３．学会等名 愛知大学国際問題研究所、東亜同文書院大学記念センター共催国際シンポジウム「東亜同文書院「大旅行」と現代東アジア」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 石田卓生
２．発表標題 東亜同文書院大学中国語教育の戦後における展開について：愛知大学を事例として
３．学会等名 日本現代中国学会第71回全国学術大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 石田卓生
２．発表標題 東亜同文書院と上海：愛知大学前史
３．学会等名 東亜同文書院大学記念センター主催「上海と東亜同文書院」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 石田卓生
２．発表標題 日清貿易研究所と東亜同文書院の連続性について：東亜同文書院院長根津一発奉天軍政署小山秋作中佐宛書信から
３．学会等名 愛知大学東亜同文書院大学記念センター主催ワークショップ「日清貿易研究所から東亜同文書院へ」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 石田卓生
２．発表標題 上海の東亜同文書院とその歴史マップ
３．学会等名 愛知大学東亜同文書院大学記念センター主催講演会「上海と東亜同文書院・愛知大学」（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計4件

１．著者名 今泉潤太郎監修、石田卓生編訳	４．発行年 2023年
２．出版社 不二出版	５．総ページ数 397
３．書名 愛知大学版東亜同文書院大学編纂『華語萃編』初集：影印・翻刻と総訳	

１．著者名 三好章	４．発行年 2022年
２．出版社 あるむ	５．総ページ数 264
３．書名 書院生の見た日中戦争	

１．著者名 藤田佳久	４．発行年 2020年
２．出版社 あるむ	５．総ページ数 264
３．書名 東亜同文書院卒業生の軌跡を追う	

１．著者名 石田卓生	４．発行年 2019年
２．出版社 不二出版	５．総ページ数 510
３．書名 東亜同文書院の教育に関する多面的研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

愛知大学リポジトリ：東亜同文書院大学記念センター
https://aichiu.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&index_id=882&pn=1&count=20&order=17&lang=japanese&page_id=13&block_id=17
愛知大学リポジトリ：中国21
https://aichiu.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&index_id=24&pn=1&count=20&order=17&lang=japanese&page_id=13&block_id=17
愛知大学リポジトリ：中日大辞典編纂所
https://aichiu.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=custom_sort&search_type=2&q=18

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関